

(論文博士・様式12)

愛知教育大学・静岡大学大学院教育学研究科

学位論文審査報告書

審査委員

審査委員長 野平 慎二
委員 稲葉 みどり
委員 石川 恭
委員 石田 靖彦
委員 香野 毅
委員 _____
委員 _____

審査期間 令和3年 11月 22日 から 令和4年 2月 8日

審査論文

自閉症スペクトラム児の対人関係の向上を目的とした心理劇的アプローチの開発

—小学校の通級指導教室における自立活動の授業実践を通して—

氏名 長田 洋一

生年月日 昭和33年 12月 8日

提出日 令和 3年 11月 8日

この論文は、特別支援教育に関する実践を基にした理論的、実証的研究である。特に、自閉症スペクトラム(ASD)児の対人関係を向上させるため、心理劇に童話の導入に着目し、小学校の通級指導教室での実践を通じて論考を行っている。

論文は、次の12章で構成されている。序章では、発達障害児に対する通級指導教室での指導内容を概観し、ASD児には主にソーシャルスキルトレーニング(SST)が行われていることを明らかにしている。第1章は、心理劇導入以前に行った通級指導教室の3事例より、教科補充より自立活動を行うべき、自立活動で行ったSSTを集団場面で生かすには般化プログラムが必要であることを論じている。第2章では、通級担当教師にアンケート調査を行った結果、SSTのやりにくさを指摘する意見が多く、新しい指導技法の開発を待ち望む声があることを示している。第3章では、精神障害者の治療方法として考案された心理劇が発達障害者に適用されるまでの経緯を述べ、心理劇を学校に導入するには、原型を変形させる必要性を論じている。第4章では、童話を筋書き通りに演じさせる心理劇を「心理劇的アプローチ」と名づけ、小学校の通級指導教室でASD児に実施する手順を示している。第5章(事例1)は、心理劇的アプローチを3年男子2名に12回実施し、集団への参加意欲が高まり、仲間意識を持ったりしたこと、第6章(事例2)は、5年女子と4年男子に15回実施し、こだわり(固執性)が減少し、劇で勝つ体験をしたことで自己肯定感が高まったこと、第7章(事例3)は、3年男子2名に22回実施し、相手を見下した態度が好意的な態度に変わり、劇で形成された自信がグループ活動での積極性につながったこと、第8章(事例4)は、4年男子2名に20回実施し、日頃の願望が劇の中で実現できたことで満足し、協力的になり、セリフを言うことで発語が促進したこと等を報告している。第9章は、4つの事例を総括し、集団への参加意欲の高揚、仲間意識の芽生え、こだわり(固執性)の減少、思いやりの心の育ちの4つの成果が表れたことを論じている。第10章では、心理劇的アプローチは、児童が主体的、意欲的に取り組むことができるという長所がある一方で、担当教師が1人で監督と補助自我を兼務しなければならないという短所を提示している。そして、第11章では、心理劇的アプローチを成功させるためには、なるべく児童が希望する童話を取り上げ、かつ、事前準備を周到にしておくことが重要であるとしている。終章では、今後の課題について触れ、ASD児以外に対象児童を拡大して行うなど心理劇的アプローチの可能性と限界について検討している。

この論文は、理論、実践、検証、考察等が精緻に記述され、データや資料も添付されており、反証可能なものであり、この分野の実証的研究としては先駆である。また、特別支援教育の今後の発展に多くの示唆を与える教科開発学の観点からの論考であり、本教科開発学専攻の学位論文に値するものである。

以上から、博士(教育学)の学位を授与するにふさわしい内容であると認める。